

尾お小屋ご鉾や山



尾小屋鉾山(能登印刷出版部提供)

天和二年(一六八二)に尾小屋鉾山の採掘を示す記録がある。採掘が本格化するの、加賀藩元家老の横山家が経営権一切を得た明治十四年(一八八二)からである。尾小屋鉾山の経営は、明治末から大正期にかけて急速に発展した。銅生産量では大正九年(一九二〇)にはピークの二二七六トを記録した。これは全国第八位の生産量であった。

一方、尾小屋鉾山では、大正九年、十一年、賃上げと待遇改善を求めて合計五度の労働争議が発生した。そのうち大正十一年のストライキは一、時は溶鉾ようこうの火も消すという、



尾小屋鉄道終着駅(小松市立博物館提供)

戦前石川県における最大規模の労働争議となった。



尾小屋の鉱山労働者たち(明治43年)(能登印刷出版部提供)

尾小屋鉱山は、昭和恐慌が深刻化する昭和六年(一九三二)には日産コンツェルン傘下の日本鉱業株式会社に買収された。日本

鉱業による経営は戦後も続いたが、昭和三十七年には北陸鉱山株式会社売却され、昭和四十六年全山廃山となった。

尾小屋鉄道は、尾小屋鉱山の鉱産物や鉱山労働者・住民の必需品を輸送するため、大正八年に開業された軽便鉄道である。新小松駅と尾小屋の間一六キロを結んだ。尾小屋鉄道も鉱山と運命をともし、昭和五十二年全線廃線となった。(山本吉次)

尾小屋鉱山の銅産出額と坑夫数

年次	銅産出額 円	坑夫数 人
明治33年	196,004	412
34年	212,532	496
35年	222,500	474
36年	272,679	615
37年	330,144	805
38年	432,987	793
39年	528,685	917
40年	620,656	785
41年	383,466	1,036
42年	435,188	1,032
43年	519,721	1,020
44年	581,195	1,105
45年	896,508	1,231
大正2年	961,951	1,536
3年	851,199	1,743
4年	1,105,154	1,296
5年	2,134,671	1,466
6年	3,095,600	1,604
7年	1,693,781	1,547
8年	3,453,281	1,594
9年	1,456,919	1,722
10年	1,391,554	1,287
11年	1,169,231	1,118
12年	1,505,348	1,133
13年	1,470,492	1,069
14年	1,271,456	564
15年	1,294,663	1,180

橋本哲哉著『近代石川県地域の研究』より



五国寺鉱区労働者の争議勝利記念写真。中央は鉱夫総連合会から派遣された坂口義治(大正11年6月)(『ふるさと石川歴史館』より)